第四講　演習問題(4)

次の文章は『源氏物語』の一節である。鬚黒大将は光源氏の養女である玉鬘に通い始め、鬚黒大将の北の方はそれを悲しんでいる。これは鬚黒大将がこれから玉鬘のもとへ行こうとしている場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

暮れぬれば、心も空に浮きたちて、いかで出でなんと思ほすに、雪かきたれて降る。かかる空にふり出でむも、人目いとほしう、この御気色も、憎げにふすべ恨みなどし給はば、なかなかことつけて、我もむかへ火つくりてあるべきを、[1]いとおいらかにつれなうもてなしたまへるさまの、いと心苦しければ、いかにせむと思ひ乱れつつ、格子などもさながら、端近ううちながめてゐたまへり。北の方気色を見て、「あやにくなめる雪を、いかで分け給はんとすらむ。夜も更けぬめりや」とそそのかし給ふ。今は限り、とどむともと思ひめぐらし給へる気色、いとあはれなり。「[2]かかるには、いかでか」とのたまふものから、「なほこのころばかり。心のほどを知らで、とかく人の言ひなし、大臣たちも左右に聞き思さんことをはばかりてなん、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめてなほ見はて給へ。ここになど渡しては、心やすくはべりなむ。かく世の常なる御気色見えたまふ時は、外ざまに分くる心も失せて A 、あはれに思ひきこゆる」など語らひたまへば、「立

ちとまりたまひても、御心の外ならんは、なかなか苦しうこそあるべけれ。[3]よそにても、思ひだにおこせたまはば、袖の氷もとけなんかし」など、なごやかに言ひゐたまへり。

御火取（注1）召して、いよいよ[a]たきしめさせたてまつりたまふ。みづからは、なえたる御衣（ぞ）どもに、うちとけたる御姿、いとど細うか弱げなり。しめりておはする、いと心苦し。御目のいたう泣き腫（は）れたるぞ、少しものしけれど、いとあはれと見る時は、罪なう思して、いかで過ぐしつる年月ぞと、なごりなううつろふ心のいと軽きぞやとは[b]思ふ思ふ、なほ心げさうは進みて、そら嘆きをうちしつつ、なほ装束したまひて、小さき火取とり寄せて、袖にひき入れてしめゐたまへり。

侍所に人々声して、「雪少し隙あり。夜は更けぬらんかし」など、さすがにまほにはあらで、そそのかし[4]きこえて、声づくりあへり。中将、木工（もく）（注2）など、「あはれの世や」などうち嘆きつつ、語らひて臥したるに、正身（さうじみ）はいみじう[c]思ひしづめて、らうたげに寄り臥したまへり、と見るほどに、にはかに起き上がりて、大きなる籠（こ）の下なりつる火取をとり寄せて、殿のうしろに寄りて、さといかけたまふほど、人のやや見あふるほどもなう、あさましきに、あきれて[d]ものしたまふ。さるこまかなる灰の、目鼻にも入りて、おぼほれてものもおぼえず。払ひ捨てたまへど、立ち満ちたれば、御衣ども脱ぎたま

ひつ。うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへり見すべくもあらずあさましけれど、例の御物の怪の、人にうとませむとする事と、御前なる人々も［ B ］見たてまつる。立ち騒ぎて、御衣ども奉り換へなどすれど、そこらの灰の、鬢（びん）のわたりにも立ちのぼり、よろづの所に満ちたる心地すれば、きよらを尽したまふわたりに、さながら e <u>まうで</u>給ふべきにもあらず。心違ひとは言ひながら、なほめづらしう見知らぬ人の御有様なりやと爪はじきせられ、うとましうなりて、あはれと思ひつる心も残らねど、このころ荒だてては、いみじきこと出で来なむと思ししづめて、夜半になりぬれど、僧など召して加持まゐり騒ぐ。

（注1）御火取…衣服に香をたきしめるための香炉。

（注2）中将、木工…女房たちの名。

問一　傍線部１「いとおいらかにつれなうもてなしたまへるさまの、いと心苦しければ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…とてものんびりして気にしないふうで、誠に愛くるしいご様子なので
イ…とても大人びて薄情なご様子が、大変心にかかって苦しく思われるので
ウ…非常に老成していてさりげない返答のご様子が、とてもつらく思われるので
エ…大変おっとりと平静にしていらっしゃるご様子が、誠に不憫に思われるので
オ…誠に平静で無表情なご様子で、こちらのほうがひどく気を遣ってしまうので

問二　傍線部２「かかるには、いかでか」は誰の言葉か。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…鬚黒大将　　イ…北の方　　ウ…大臣たち
エ…玉鬘　　オ…女房たち

問三　空欄Ａに入る最も適切な語句を、次の中から一つ選べ。

ア…なほ　　イ…やは　　ウ…だに　　エ…なん　　オ…こそ

問四　傍線部３「よそにても、思ひだにおこせたまはば、袖の氷もとけなんかし」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…離れた世界にいても、お互いに夫婦の愛情さえあれば、このように嘆くこともなくなることでしょう。
イ…離れていても、あなたが子供達のことさえ心配してくださるなら、私が嘆いて流す袖の涙の氷もとけるでしょう。
ウ…あなたのことをよその方が思っていらっしゃるのならば、あなたが嘆いて流す袖の涙の氷もとけることでしょうね。
エ…あなたがよそながらでも、玉鬘のことさえ大切に思っておられるなら、玉鬘が嘆いている袖の涙の氷もとけるに違いありません。
オ…あなたがよそにいらっしゃっても、せめて私のことを思い出してくださるなら、私が嘆いて流す袖の涙の氷もとけることでしょう。

問五　傍線部ａ～ｅの主語はそれぞれ誰か。主語の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…ａ　北の方　ｂ　鬚黒大将　ｃ　女房たち　ｄ　北の方　ｅ　鬚黒大将
イ…ａ　鬚黒大将　ｂ　北の方　ｃ　鬚黒大将　ｄ　女房たち　ｅ　北の方
ウ…ａ　北の方　ｂ　女房たち　ｃ　鬚黒大将　ｄ　北の方　ｅ　鬚黒大将
エ…ａ　鬚黒大将　ｂ　女房たち　ｃ　鬚黒大将　ｄ　鬚黒大将　ｅ　北の方
オ…ａ　北の方　ｂ　鬚黒大将　ｃ　北の方　ｄ　鬚黒大将　ｅ　鬚黒大将

問六　傍線部4「きこえ」は、誰への敬意をあらわす語か。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア…鬚黒大将　　イ…北の方　　ウ…大臣たち
エ…玉鬘　　オ…人々

問七　空欄Bに入る最も適切な語句を、次の中から一つ選べ。

ア…あさましう　　イ…いとほしう　　ウ…うとましう
エ…なごりなう　　オ…つれなう

問八　本文の内容と合致するものを次の中から一つ選べ。

ア…鬚黒大将は雪がひどいので、玉鬘のもとに出かけるかどうかを迷っていた。
イ…北の方は鬚黒大将の裏切りを非難し、怒りのあまり灰を鬚黒大将に浴びせた。
ウ…北の方の女房たちは、失敗したふりをして火取りの灰を鬚黒大将に浴びせた。
エ…北の方は物の怪のせいで感情を抑えられなくなり、常軌を逸する行動に出た。
オ…鬚黒大将は、北の方が物の怪のふりをして灰を浴びせたのではないかと疑った。

第四講　演習問題(4)

〈模範解答〉

問一　エ	問二　ア	問三　エ	問四　オ
問五　オ	問六　ア	問七　イ	問八　エ

〈現代語訳〉

日が暮れたので、（鬚黒大将は）心もそわそわと落ち着かず、何とかして（玉鬘のもとへ）出かけたいとお思いになるが、雪が激しく降る。このような空模様に強いて出かけて行くようなことも、体裁が悪く、この（北の方の）ご様子も、憎らしそうに嫉妬して恨みなどなさるならば、かえって（それを）口実にして、自分も逆に腹を立て（て出て行け）るのに、大変おっとりと平静にしていらっしゃるご様子が、誠に不憫に思われるので、どのようにしようかと思い悩みながら、格子なども上げたまま、端近くでぼんやりと考えこんでいらっしゃる。北の方は（鬚黒大将の）様子を見て、「あいにくのような雪を、どのように踏み分け（てお出かけ）なさるのでしょうか。夜も更けてしまうようですよ」と促しなさる。もうおしまいだ、引き止めても（仕方がない）と、あれこれ考えていらっしゃる（北の方の）様子は、たいそう気の毒である。（鬚黒大将は）「このような雪では、どうして（出かけられるか、いや、出かけられない）」とおっしゃるけれども、「やはり（通い始めた）ここしばらくくらいは（行かないわけにはいきません）。私の気持ちもわからないで、あれこれと女房たちが取り沙汰したり、大臣たちもあれこれの噂をお耳にして何とお思いになるか心配で、（訪問が）途切れるのは気の毒だ。気持ちを落ち着けて（あなたは）やはり最後まで見ていてください。（玉鬘を）この邸になど引き取ってしまえば、気兼ねもいらないでしょう。このように普通のご様子にお見えになるときは、他の女に移る心もなくなって、（あなたを）しみじみと愛しくお思い申し上げる」などとおっしゃると、「おとどまりになっていても、お気持ちがよそにあるのなら、かえって辛いでしょう。（あなたが）よそにいらっしゃっても、せめて私のことを思い出してくださるなら、（私が嘆いて流す）袖の涙の氷もとけることでしょう」などと、穏やかにおっしゃっている。

（北の方は）香炉をお取り寄せになって、（大将の装束に）いっそう香をたきしめさせて差し上げなさる。ご自分は、着慣れて柔らかくなったお召し物を重ねた、普段着のお姿で、ますます細くか弱そうである。物思いに沈んでいらっしゃるのが、たいそう気の毒である。お目がひどく泣きはらしているのは、少し疎ましいけれど、しみじみと愛しいと見る今は、（大将も）悪気なくお思いになって、どのように過ごしてきた長い年月かと、すっかり（他の女に）心変わりしたことが（自分でも）ひどく軽薄だとはよくよく思うが、やはり（玉鬘に）よく見られたいという思いは募る一方で、偽りの嘆きをしてみせては、やはり装束を整えなさって、小さな香炉を取り寄せ、袖の中に入れて香をたきしめていらっしゃる。

詰所で供人たちの声がして、「雪が小止みになっています。夜は更けてしまうでしょうよ」などと、そうはいってもやはりあからさまにではないが、（鬚黒大将にお出かけを）促し申し上げて、咳払いをしている。中将や木工など（の女房）は、「情けない仲だこと」などと嘆きながら、話し合って横になっているが、本人〔＝北の方〕はじっと気持ちを落ち着けて、いじらしく脇息に寄り伏していらっしゃる、と見るうちに、急に起き上がって、大きな伏籠の下にあった香炉を取り寄せて、大将の後ろに近寄って、さっと灰を浴びせかけなさるときは、人々がよく見届ける間もなく、（大将は）驚きのあまり、呆然としていらっしゃる。あの細かな灰が、目にも鼻にも入って、ぼうっとして何もわからない。（灰を）払い除けなさるけれど、一面に立ち込めているので、お召し物を何枚も脱ぎ捨てなさった。正気でこのようなことをなさるのだと思うならば、二度と情けをかけることもできないほどあきれるけれど、いつものように御物の怪が、（北の方を）人に嫌わせようとしてすることなのだと、おそばにお仕えする女房たちもお気の毒に見申し上げる。大騒ぎをして、お召し物をお着替えなさりなどするけれど、たくさんの灰が、鬢のあたりにも振りかかって、どこもかしこも灰だらけという気がするので、善美を尽くしていらっしゃる（玉鬘の）お邸に、（鬚黒大将は）そのまま参上なさることはできない。乱心のせいとは言うけれども、やはりめったにない（今まで）見たことも聞いたこともないお振る舞いだと思わず（腹立たしく思って）爪弾きをし、嫌になって、（先刻の）愛しいと思った気持ちも消え失せて残っていないが、今、事を荒立ててしまったならば、大変なことになるだろうとお気持ちを静めて、夜中になってしまったけれども、僧などをお呼びになり、（物の怪退散のために）加持をして差し上げ騒ぐ。